



学校法人  
鎌倉女子大学

## アシタ仙人の涙

今年の初等部の入学式は、晴天の4月8日、満開の桜の中で行われました。また、この日は、ちょうどお釈迦さまのお誕生日にあたる花まつりの日。

お釈迦さまが、今から2500年ほども前、現在の北インドからネパールに少し入ったルンビニーという所の綺麗な花園でお生まれになった時、天が喜び祝って、おごそかな音楽を響かせ、甘露の慈雨を降りそそいだという故事にならって、日本を初め仏教国ではみな、寺々を中心に花御堂をこしらえ、その中に天と地を指さす幼い釈迦立像を安置し、柄杓で甘茶をそそいで、お誕生を祝う習慣がひろく行われています。

そんな日と重なったからか、松本講堂の壇上から、座席の上にちょこんと小さな顔を出して座っている可愛い新入生たちの姿を眺めながら、ふと、アシタ仙人の涙の話の思い出しました。

私がまだ小学校に入るか入らない頃、父が子ども向けの釈迦伝を書いたことがありました。ストーブもない時代のこと、書齋で、机の下に火鉢をおき、その火鉢ごと足をスッポリ薄茶の毛布にくるんで、熱心に執筆していた父の姿は、今でもよくおぼえているものです。

その本が出版されて、ある時、学校の図書のコナーで、その本を見つけて、子ども心によほど誇らしかったのでしょうか、私の読書の時間はといえば、決まってその本を引っ張り出して読み耽ることでした。私が教室でその本しか読まないものですから、父母会の折に担任の先生が、「福井君は、どうも『おしゃかさま』しか読まないようですが……、お家で他の本はすすめないのでしょうか……」と、皮肉まじりに母に告げたということ、後年聞いたことがありました。そんなわけで、お釈迦さまの生涯は、幼い私の心象を形成したように思われますが、アシタ仙人の涙は、釈尊の生涯が語られる時に必ず触れられる有名なエピソードの一つです。

お釈迦さまが生まれた時、徳の高いアシタという仙人が、「尊い赤ちゃんが生まれた不思議な徴を見ました」といって、はるばる訪ねてまいりました。父親のスッドーナは、シャカ族の王さまであったものですから、すっかり喜んで、仙人を城に招き入れて、わが子の将来を占ってもらうことにしました。すると、アシタ仙人は、「これは、これは、尊い王子さまです。後には立派に成人なさり、必ずや人々の悩み苦しみ悲しみを救って下さる仏陀（目覚めた人）とおなりになりましょう」、そういって、はらはらと涙を流しました。王さまが訝しく思って、「なぜ、泣くのか」と、そのわけを尋ねますと、アシタ仙人は、こう答

えます。「私は、もう年をとってしまって、この王子さまがやがて仏陀とおなりになり、その尊い教えの恵みに与<sup>あずか</sup>ることが出来ないのが悲しいのでございます」。

そのくだりは、子ども心に妙に印象深いものでした。ただ、その頃は、お釈迦さまのような偉い方に会ったので、アシタ仙人は、感動して、感激の涙を流したのだらうと、文字通りに解釈しておりましたが、けれど私も年をとり、いやいや、そうした思いは、お釈迦さまだからなのではない、新しい命が授<sup>さづ</sup>かったどこの家庭もが同じように、両親は元より、殊にお祖父さま、お祖母さまはきっと、アシタ仙人と同じような思いに打たれるのだらう、そうしきりに思うようになりました。

親は、わが子のゆく末を見とどけることを出来はしません。特に祖父母にとって孫が立派に成長した姿を見とどけるのは、こうして長寿が許されるようになった今日においてさえ、なかなか叶えられないことです。でも、またそうであるからこそ、過ぎゆく世代は、来るべき世代のつつがない成長を願うのであり、きっと誰もがひたすら同じ思いに立つに違いないのです。

子どもは、どこの家庭にとっても掛け替えのない宝もの、新入生の立派な成長を祈らずにはおれません。

[>前のページへ戻る](#)